

## 審査の結果の要旨

氏 名

松 隈 洋

本論文は戦前、戦後の日本近代建築を主導し、数多くの建築作品を残した建築家・前川國男（1905～1986年）の戦前期における建築思想の形成について明らかにしようとするものである。ここでいう戦前期とは、前川が、1928年3月東京帝国大学建築学科を卒業し、フランスの建築家・ル・コルビュジエ（1887～1965年）のアトリエに学んだ時点から、1930年4月に日本へと帰国し、同年8月からアメリカ人建築家のアントニン・レーモンド（1888～1976年）の事務所を経て、1935年10月1日、前川國男建築設計事務所を設立して独立し、1945年8月15日の敗戦を迎えるまでの時期を指している。

戦前期の前川國男に関する一次資料の大半は、東京銀座にあった前川の事務所が1945年の空襲により焼失してしまったために、ほとんどの設計原図や写真資料などが失われてしまっている。本研究では、こうした中で、自邸に保管されていたことなどによって奇跡的に焼失を免れた、前川國男の『日誌』（1941年3月～1942年1月）、蔵書に残されたメモとスケッチ、個人のアルバム、一部の建築の設計原図や写真などの資料と、各種刊行物などを基に検証を行っている。

本論は、序論と結論、全5部より構成されている。

第I部では、前川が東京帝国大学を卒業する1928年から、パリのル・コルビュジエのアトリエに学んで、1930年に帰国するまでの2年間を扱う。コルビュジエのアトリエでどのような仕事を担当し何を学んだのかを分析し、さらに、戦前期の前川の主要な活動の舞台となった公開コンペへの応募の始まりとなった「名古屋市庁舎」コンペ案（1930年）についての分析も行っている。その結果、前川はコルビュジエから基礎的な建築教育を施され、平面計画、プランニングが重要であること、近代建築の実現を阻む旧体制やアカデミズムとの闘いが避けて通れないことなどを学んだことが明らかにされた。

第II部では、1930年の帰国後、レーモンド事務所を経て1935年10月に独立するまでを扱う。その中で、「東京帝室博物館」コンペを扱い、前川の処女作となった「木村産業研究所」（1932年）を検証する。さらに、レーモンドからどのような影響を受けたのかについても検討している。その結果、「東京帝博物館」が審査員の考えた建築様式の議論とはまったく位相を異にする考え方から生み出されたものであり、むしろ使用者の要求に応えつつ、建築を白い背景に徹底させようとしたものであることを明らかにした。また、「木村産業研究所」の経験が、近代建築を日本の気候風土に適合させることが必要だとの認識を与えたことを確認した。

第III部では、1935年の独立以降、1937年の日中戦争が始まる時期までを扱う。独立後の第一作となった「森永キャンデーストアー銀座売店」（1935年）、「日本的なるもの」をめぐって大きな議論が起きた「パリ万国博覧会日本館」コンペ（1936年）、幻に終わった1940年の「第十二回オリンピック東京大会」の会場計画へのかかわりについても詳しく検証している。また、この間に手がけた「守屋邸」（1936年）から「笠間邸」（1939年）へと至る住宅作品の方法を確認している。

第IV部では、日中戦争の勃発から、建築資材統制と戦時体制への急激な移行の中で、前川がかかわった満州などの国策企業に関係する仕事、「日本万国博覧会建国記念館」コンペ（1937年）、一等を獲得した「大連市公会堂」コンペ（1938年）、「忠霊塔」コンペ（1939年）などでの設計思想の変化を検証している。

そして国策プロパガンダの制作を担った「報道技術研究会」への参加の実態についても見ていく。その結果、この時期の前川は「日本的なもの」への意識は稀薄であり、近代建築の実現のためには近代構造の確立、技術の確立が必要であるという原理的な思考を続けていたことが明らかにされた。

第V部では、1941年12月の太平洋戦争勃発以降、前川が深くかかわっていった建築学会の「大東亜建築委員会」、「大東亜建設記念営造計画」コンペ（1942年）の審査をめぐる議論の推移を検証する。また、前川の『日誌』や蔵書から見る読書歴、そこに残されたメモやスケッチなどから、前川の建築思想の深化について触れている。そして、それらの一つの結実となった、「前川國男自邸」や、「在盤谷日本文化会館」コンペで示された前川國男の戦前期の建築思想の到達点について見ていく。その結果、前川が京都学派の著作を精読し、そこから建築のありようを考える手がかりを得ていたこと、日本の伝統から近代建築の空間構成をより良きものにできるエッセンスを見つけ出していたこと、などが明らかにされた。

結論では、戦時下の前川の建築思想の深化が、自覚的に伝統と向き合う中で育まれたものであり、従来言われてきたような転向や挫折という文脈にあったものではないことを確認し、むしろ、前川の戦後の代表的な建築へと結実する建築思想の核心部分が、この戦前期に形成されたものであることを明らかにしている。

以上を通じてこの研究は戦前期における前川國男の建築的立場を全体的に位置づけることに成功したものであり、日本近代建築史研究に多大な貢献をなす業績を上げている。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。